

岡山大学

埋蔵文化財調査研究センター報

第 6 号

1991年 8 月 発行

岡山大学
埋蔵文化財調査研究センター

〒700

岡山市津島中3丁目2番1号

☎(0862)52-1111 内線246



—— 岡大キャンパス出土の自然遺物 ——

遺跡を発掘していると、木の葉っぱを見つけるときがあります。水分の多い土から出てくるものは、葉に緑が残り、生木そのものといった幹もしばしば。縄文時代のものでもそうです。ところが土から取り出して1、2分もすると、もう真っ黒。玉手箱の煙ではないのですが、空気にふれると3000年、4000年という年月をあっという間にとりもどして、現代の「遺物」に変身するわけです。

こうした植物遺体は、過去の自然環境や気候、人間の食料のあり方などを知るためにとても貴重な資料となります。岡大構内の遺跡からは、縄文時代以来の木の葉・種子、それに木で作った道具がかなり多く出ます。津島・鹿田キャンパスとも、沖積平野にあるため、植物遺体が残しやすいのです。

ところが植物性の遺物は、出土後の保存がなかなかたいへんです。樹脂で固めるなど、貴重な文化財を永久に保存するための処置が必要です。センターではいまこの作業を進めつつありますが、いずれこうした資料を公開し、岡大の地下に眠っている過去の自然や人間の営みにふれていただければ、と願っています。

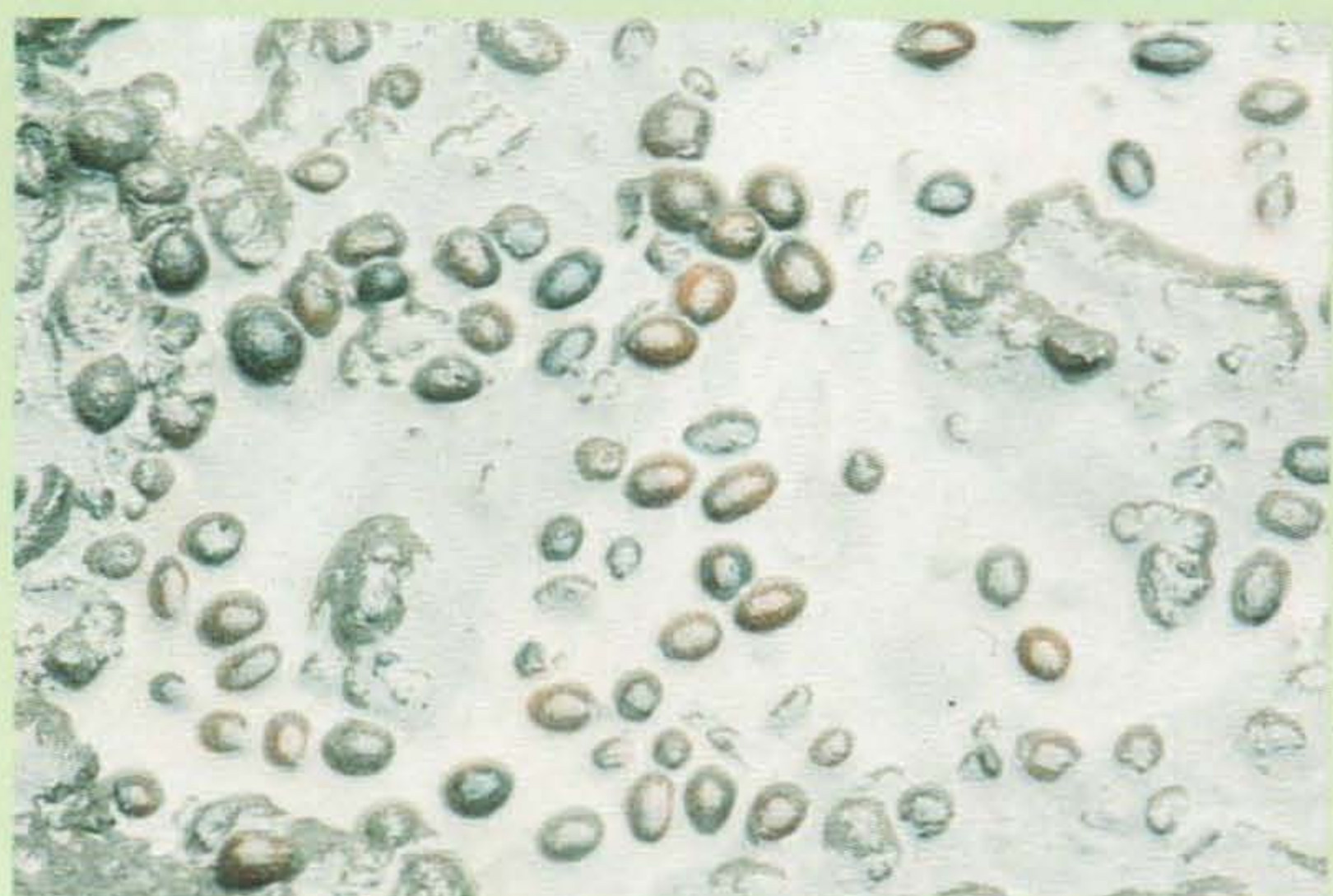
(センター長・文学部教授 稲田孝司)

構内から出土する植物遺体（1）

植物遺体。当時の人々が食し、利用した様々な植物。それらは腐敗し易く残りにくい。しかし、沖積地等では良好な保存状態を保つこともあり、当時の姿のままで姿を現すことがある。

沖積地に立地する岡大構内遺跡でも、その例に洩れず、各地点で植物遺体が出土している。その出土状況は津島地区と鹿田地区とでは遺跡の性格の違いから少し異なった様相が認められる。津島地区で発見される植物遺体は縄文時代後・晩期（約3500～2200年前）まで遡る食糧貯蔵穴から出土する種子類が中心で、これらは当時の食生活を如実に現す資料である。一方、鹿田地区では弥生～鎌倉時代の井戸から出土する種子類が多く、当時の人々の水に対する意識、祭祀的な要素を窺い知ることができる。

縄文時代の貯蔵穴は地面を径1m・深さ0.8m程度掘りこんで作られている。その中から確認される堅果類・草本類等の中ではドングリ類の量が圧倒的に多く、直接、穴に入れられたり（写真）、



ドングリ出土状況(大学院自然科学研究科棟調査地点)
縄文時代後期(約3000年前)の貯蔵穴から出土するドングリである。当時、重要な食糧源であったドングリが色あざやかに姿を現している。



調理に使用した道具

(大学院自然科学研究科棟調査地点)
縄文時代後期の土器（深鉢・浅鉢）と石器（石皿・すり石）である。土器で煮沸やアク抜きを行い、こうした石器で木の実を潰していたようである。

深鉢に入れて貯蔵したものも発見されている。その他にトチ、僅かにクルミを含むこうした堅果類は、当時、重要な食糧源の一つであったが、ここで興味をそそるのが調理方法である（写真）。落葉広葉樹のドングリやトチは食するに当たり入念なアク抜きが必要となる。しかし、西日本一帯は、当時、照葉樹林帯に属しており、構内遺跡周辺にもアク抜きの容易なドングリ類の林が広がっていたと考えられる。簡単なアク抜き技術を知った段階から、保存食として秋に集中的に採集され、川辺に水漬けに近い状態で蓄えられたのである。

堅果類の他には、シソ属・マメ科・ナワシロイチゴ・ブドウ属・カジノキ・ヒョウタン・アカメガシワ・カナムグラ等の種子が出土している。その中には簡単な栽培を想起させるものなども認められる。また、当時の周辺の環境復元に役立つものも多く、食生活の復元以外にも、様々な視点を含んでおり、今後の分析が期待される。

鹿田地区の植物遺体については、紙面の都合でここでは略すが、いずれ機会があればそこで述べることとしたい。
(助手・山本悦世)

表紙写真説明

いずれも工学部生物応用工学棟用地の調査で出土した植物遺体の拡大・顕微鏡写真。

中央は貯蔵穴出土のドングリ類。上段左からエノコログサ、カラスノサンショウ、ナワシロイチゴ、カナムグラ。下段左からキランソウ、ヤマブドウ、タデ類？、シソ類。これらのうちナワシロイチゴ、ヤマブドウ、シソ類などは食用としただろう。あとは雑草類だが、当時の植生を知る手がかりとなる。

平安・鎌倉時代と岡大キャンパス

—福輪寺縄手をめぐって—

(前号より続く)

(承前)『平家物語』の記事から推定した福輪寺縄手の幅員を工学部生物応用工学棟新営工事の発掘結果の坪境線と比べると問題は残るとしても、畦畔の傾向線は7層の自然地形に制約された河川の流路・畦畔から、6層の東西南北を示すものへと変化したことは明白である。この状況は5層(古代)の杭状遺物を出す大溝をはさんで再び3層の畝状遺構を持った畦畔に戻るわけである。

このことを当時の記述にあわせて検討してみよう。中世の戦の勝敗は攻守における機動力としての馬の効果的使用法とその効力の減殺法にあった。乱杭は泥田や水中に打ち、それらを綱で結びつけることによって、また、逆母木は鹿の角状の堅木を先をとがるように切ってそれらを結びつけることによって馬による行動をはばむことができた。この状況は現在の発掘結果からは明らかにしがたいが、3層上面の畝状遺構が、バックマーシュなどの湿田地帯にみられる島畑景観と同じものであることを考えると、当時の自然環境が、乱杭・逆母木を使用するに有効な低湿地であったことは容易に想定できる。

道は想像以上にならない。古い道を利用しながら、修正し、新しい交通体系を形造っていく。そこで、福輪寺縄手の来し方、行く末をさぐって

みよう。まず第一には可真郷の惣官頼隆を山しるべとして北路をとって烏岳をめぐり、佐々の迫を攻めたという記事がある。ここで意味をもつのは近年岡山市教育委員会が行っている津高団地内遺跡群の調査によって明らかとなった古道である。御案内下さった結果を参考にさせてもらうことにしたい。この古道は烏岳の北からダイミ山の北の谷を東にのぼる幅員6mのもので、其後の改修はあったとしても、かつて足利健亮氏が想定した原初山陽道を北に1町ずらしたもので、直線の原理に貫かれて山腹を真すぐに東上しており、いずれかの時期の山陽道ではないかと考えられている。

『東備郡村史』には古官道として舟坂より藤野を経由、牟佐を通過して三野郡宿・津島・福隆寺阡(福輪寺縄手)・笹ヶ迫を経て、津高郡辛川村・板倉へと通じていたが「何れの頃より停て、今の如く邑久上道の地にかえたるか」とし、寿永・元暦の頃まではこの古官道を往き来したとしている。しかし、この道が当時の山陽道であれば、可真の惣官頼隆を山しるべとしなくともわかっていただろうし、それなればこそ、「北路」と記したわけで、国府経由三野の渡しのルートが正規の道で、それなるが故に、裏をかかれた兼康が敗北することになるのである。従って、発掘された道こそ、国府経由に先行する山陽道で、岡山大学の津島キャンパスを通るいわばダイミ山南路は、想像以上に湿地の中の道ではあったが、北路以降の正規の山陽道であったわけである。

(前センター長 高重進)



岡大キャンパスと古代・中世の山陽道 キャンパス背後の山並がダイミ山。「北路」はこの後側を通り、「南路」が手前の山裾を通過していたと考えられる。

◆◆◆最近の発掘調査から◆◆◆

-----鹿田遺跡 6 次調査（R I 予定地）-----

昨年11月に始まった鹿田遺跡の第6次調査は、盛夏を迎える前に無事終わりました。今回の調査では鎌倉時代、および弥生時代末～古墳時代前半の人々の生活の跡が見つかり、大きな成果をあげることができました。その一部をご紹介します。

現在の地面より約1.5メートルの深さにある鎌倉時代（13世紀）の層からは、井戸や溝のほか、建物の柱を支えた穴などが発見されました。これらの重なり具合から、まず東西・南北方向にいく筋もの溝が次々と掘り直され、これらが埋まったのちに掘立柱の建物や井戸が作られていることがわかりました。このことは、はじめ集落の端の方にあたっていたこの地点が、やがては人々が住む中心に近い場所へと移り変わっていることを物語っており、集落が大きくなっていくようすを見



土器の出土のようす

古墳時代初め頃の壺です。1700年の眠りから、いま目覚めました。割れていますが、つなぎ合わせればもとの形に復元することができます。

て取ることができます。溝や井戸から出土する土器には、この地方で作られたもののほか、国内各地や中国からもたらされた品もあり、当時の盛んな商品流通のさまが目に見えるようです。

鎌倉時代層のさらに下からは、弥生時代末～古墳時代前半（3世紀末～4世紀）の層が出てきました。ちょうど邪馬台国の時代を経て、各地に古墳が築かれ始める頃にあたります。この層では数本の溝のほか、土器や木材片の入った穴が見つかった程度で詳しいことはわかりませんが、おそらくこの時代の集落の中心はもっと東の方にあり、この地点は集落の端にあたるのではないかと考えられます。土器などの出土品は、少ないながらも残存状態がよく、貴重な研究資料となるでしょう。

派手な発見はありませんでしたが、こうした地道な調査の積み重ねと資料の蓄積こそが、歴史研究の大きな推進力となるのです。

（助手・松木武彦）



掘立柱建物跡の調査

建物の柱を支えていた丸い穴がたくさん見つかりました。これは何棟もの建物が相次いで作られた跡です。これらの穴の中から等間隔で一直線に並ぶものをさがし、一棟ごとの建物の大きさや向きを復元していきます。

編集後記

遺跡から出てくる果物の種や木の実、何百年、何千年もの歳月を経たとは思えないほど生々しく、土器や石器を掘り出したときとはまた違った感慨を与えてくれます。ドングリ、トチ、クルミ、ヤマブドウ…自然そのものの野山の幸はどんな味がしたのでしょうか。人工的な甘味や化学調味料に慣らされてしまった私たちにとって、その鮮烈さは想像できないものなのかも知れません。ほんとうの豊かさとは何か、考えさせられてしまうこの頃です。

（M）